

伴 史郎（ばん・しろう）

1、プロフィール

方言詩人、作曲家。昭和 43 年頃から大学ノートに、津軽弁の詩を書き始める。津軽方言詩集『津軽風物帖』は、棟方志功、竹内俊吉ら多くの著名人から共感を呼んだ。

<生没>

1907(明治 40)年4月 21 日～1975(昭和 50)年1月 23 日

<代表作>

『津軽風物帖』、伴音楽研究所、昭和 45 年 10 月 15 日。

『新編津軽風物帖』、落合書店、昭和 48 年8月 20 日。

<青森との関わり>

田舎館村垂柳出身。青森師範学校卒業後、南津軽郡内の小学校に勤務。昭和 10 年、作曲家を志し上京する。

2、作家解説

田舎館村立垂柳小学校、黒石高等小学校を経て、昭和2(1927)年青森師範学校を卒業。尾上尋常高等小学校を振り出しに南津軽郡内で教壇に立つ。昭和 10 年上京し、日本高等音楽学校で作曲を学ぶ。NHK・テイチク・キングレコードなどで作曲、合唱指導に携わり、昭和 17 年から 18 年にかけて雑誌「国民の音楽」に、「魔王(名曲夜話)」などの作品を発表した。

戦後、疎開先の栃木県内の中学校、高校の講師を経て、宇都宮市に伴音楽研究所を開設する。ピアノのレッスンをする傍ら、昭和 43 年頃から「流木(るぼく)の記」と題した大学ノートに、望郷の思いを馳せながら津軽弁の詩を書き始める。「やがては消えてしまうであろうと思われる伝統ある素晴らしい津軽弁を、少しでも永く後世に残したいと念じ、津軽弁による「津軽風物帖」をかき続けています。生

涯、故郷の風景、人情の美しさを忘れることが出来ません。」(津軽新報、昭和 49 年1月1日)

津軽方言詩「一戸先生の思い出」は、大正9(1920)年、黒石高等小学校での担任であった詩人一戸謙三を回想した作品である。「先生ア背(へ)ア大(オ)きもんだハデ、ベビーオルガンサ脚(スネカラ)はまらねで、ずっと後(うしろ)がら足伸して背中(ヘナガ)丸くして弾(ナラ)した。」黒石高等小学校の同期には、ピアニスト工藤勝衛、詩人白戸郁之介(本名鈴木大)、詩人北山六智夫がいた。

また、津軽方言詩「天心童子」は、青森師範に在学していた大正12年頃、合浦公園で写生をする棟方志功を回想した作品である。「志功ア近視だハデ／キャンバスサ額(ナズギ)くっつけで描えで居(エ)る。」青森師範の同期には、詩人工藤正一がいた。昭和45年から49年まで、伴の津軽方言詩は、「東京と青森」(東京青森県人会)に「津軽への旅(6回)」とともに掲載された。

昭和49年8月、津軽・下北を旅行した際、病に倒れ、翌50年1月23日逝去した。

3、資料紹介

○『新編津軽風物帖』

図書(津軽方言詩集)193頁

1973(昭和48)年8月20日

185mm×130mm

大正9年、黒石高等小学校で担任であった一戸謙三を回想した「一戸先生の思い出」、大正12年頃、青森市合浦公園で写生をする棟方志功を回想した「天心童子」など、95編の津軽方言詩が所収されている。『津軽風物帖』昭和45年10月15日の続編である。